

## 渡辺の「べ」

ある会合で。

「失礼ですが、ワタナベさんでいらっしゃいますか。離れたところにいたのですがお連れの方が『ワタナベさん』とお呼びしたのを小耳にはさんだものですから。」

「そうですが、なにか」

「実は私もワタナベでして、それだけのことですが何となく親近感がわいてしまって」

「そうですか。あなたの『ナベ』はどういう漢字ですか。私は漢字で書くと『辺』なのですが」

「わたしは『邊』です。それが何か。」

「ハアアそうすると残念ながらあなたと私は同じ『ワタナベ』姓でも何の関係もないのかもしれませんな」

「??？」

(この会話はフィクションである。)

「ワタナベ氏」には大きく分けて2系統あって、ひとつは古代の職能集団「ワタベ」。同じ系統に北部九州の松浦氏がいて、大和政権に取り込まれる以前からおそらく韓半島との通行にもかかわってという話がある。中世、戦国時代も水軍として活躍した古い氏族である。水軍は戦闘のないときは交易にも関与した。交易上場合によっては略奪的方法にでることもある。被害を受けたほうから見れば「海賊」と呼ばれることになる。(誤解を解いておきたいのはこの文を読む渡辺さんに限っては海賊であったといっているのではない)

九州で松浦だから本拠地は松浦半島、松浦はそのむかしは末羅<sup>まつら</sup>と書いて魏志倭人伝に出てくる倭国を構成する末羅国に比定されている場所である。

中国から倭国に来る場合、倭国で2番目に現れるのが対馬国で、この国の生活状況のひとつに「南北に市糶<sup>してき</sup>す」、つまり海を越えての米の買い付けがあった。「糶<sup>糶</sup>：チョウ」は穀物のことでこれを「入れる」のが「糶：テキ」つまりは米などの穀物を買入れる意味である。これの対語が「糶：チョウ」で米・穀物を売りつけることである。この両者とも異体字で傍のない

「糶・糶」が俗字として存在する。中国の簡体字ではこの略字体を採用している。

それは余計な話として、松浦半島と韓半島の間が存在する対馬の住民は南北に市糶していたのをみて松浦の人々が「糶」のために舟で行き来していたのだろうとは推測がつく。

もうひとつの「ワタナベ」氏は嵯峨源氏（嵯峨天皇の世に皇室から下った源氏）のひとり源綱が関係する。源（渡辺）綱は大江山の鬼退治で有名な源頼光の四天王のひとりである。後裔は淀川の航行権を持ち、運送業を取り仕切っていたという。

平安末期当時皇族の人数が多くなりすぎ、朝廷から皇族への生計費の直接支給が難しくなった。だから皇族の資格を取りあげて臣下におろした。今で言うリストラである。ただ現代と違うのは会社で面倒見られなくなって突き放すのではなくて、領地を与えて独立採算を命じたのである。源綱が皇族から離れた。この方が領地としていただいたのが、当時の淀川河口の渡辺庄であった。そこで地名をとって「渡辺」と名乗った。「渡辺綱」の誕生である。

嵯峨源氏の渡辺氏は先に存在した地名「渡辺」の拝借ということになる。この系統の方のお名前は1字が特徴である。俳優の「渡辺徹」氏のように。

ところがワタナベ氏の流れはこの2種にとどまらないようなのである。なぜかという、姓をあらわす漢字のバリエーションが他の姓氏にくらべ飛びぬけて多いのである。同じワタナベ氏の中で自らの家系を特化しようとしているように見受けられる。意識してそうしている風なのである。

「ワタナベ」姓をどのように漢字で表記するかいくつか挙げてみよう。

渡辺・渡邊・渡邊・渡部・渡鍋・綿鍋・綿部・綿奈部・綿奈辺・  
綿鍋・毘食邊・度邊・濱邊・廣辺・渡與・渡恵・和田鍋・競

とこれくらいある。

最後の「競」は渡辺綱の子孫に渡辺<sup>きそ</sup>競という方がいて、たいした美男子で宮中でたいそうもてたといわれる。この方の子孫の方が姓に「競」を使っている。読み方は「ワタナベ」である。

ここまでは他の姓氏でも行われていることだ。例えば戦に負けて落ちて生き延びる際に、前の姓を隠す意味があったから漢字を変えたこともあるようで、何らかの事情で元の姓との関連を曖昧にするために書き換えたこともあるだろう。

第1要素	足	え	え									
第2要素	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞
第3要素	八	八	八	ル								
第4要素	方	口										

ところがワタナベ氏は別な展開を見せる。言葉の基幹はあくまで「渡辺」であるが、この「辺」の字を書くのに旧字の「邊」の異体字を多数作り上げて使用しているのである。

私が知っている「辺」の異字体は 20 字程度であるが、実際には 60 種以上はあるといわれる。具体的にそれらの文字を見てみよう。右表のように「邊」の構成要素である「シンニョウ」「自」「ウ冠」「八」「方」の考えられる異字形エレメントを単純に掛け合わせると実際に使われない文字があるが理論的には軽く 200 種を超えるくらいある。

参考までに漢字字体の包摂を打ち出しているで JIS の中で、コード付けされている「辺」は「辺(正字)」「邊(旧字)」「邊(俗字)」3 種だけである。

ワタナベ氏の場合「邊」の異字体を創作してまで自分の姓を特化することが、自分が「ワタナベ」であることを隠そうとしてのことではない。むしろ逆だ。

『私の姓は「ワタナベ」である。しかしそんじょそこの「ワタナベ」の系統ではない。その証は私の姓の漢字を見ればよい。世の中ほかにこのように書く「ワタナベ」はおるまい。』

といているかのようだ。

なぜなのか。「ワタナベ」氏の 2 系統をわけるために姓の表記に変化をつけたというのは理由として弱い。異字体は 3 種以上あるからだ。

渡辺綱が原点であるなら「皇族起源」の方は自己のルーツの誇りを示すのに 1 種あれば十分だ。それに嵯峨源氏渡辺氏の家系の流れを示すには家紋という有効な手がある。ちなみにその家紋は「三ツ星に一」または「三ツ星」であるという。

すると「邊」の異字体が多数ある理由はほとんど「皇族起源ワタナベ氏から見れば土着勢力」に帰すると考えられる。

「ワタナベ」は「渡部」と言う説がある。水上交通の技能または利権持つ職能集団の「部」である。「部」は大和朝廷になってから実施された支配方式である。この考えは祖先を皇室に関連付けておけばよいという寄らば大樹の陰方式である。

この説の弱いところは、現在あまりにワタナベ姓を持つ人が多いことだ。渡辺姓を持つ方は日本全国で姓名が 15 万種あるといわれる中で第 5 位くらいに位置する。古代、渡辺氏はそんなに多くなかったとして、特にワタナベさんに限って人口の拡大に熱心だったから人数が増加したなんてことはない。すると昔から「ワタナベ」姓を名乗る人が多かったことになる。職業によって人民を管理する方式が「部」であるから、いくら四海に囲まれている国でも日本の全海岸線に「渡し」の技能を持つ人を配置するわけには行かない。ずっと後代であるが、高句麗国

や渤海国から日本に来る船は韓半島の東海岸から出発するためにどうしても新潟あたりになってしまう。それを天皇は「九州にこいとっているだろう」と再三注意している。日本のどこにでも来ていいよなどということは管理上いえない。「部」にするなら必要な人数に絞っておいた方が、国防上安全である。

では後代に一般臣民が姓を持つときに「部」である「ワタナベ」姓に憧れたからだというのはどうだ。明治時代に国民は全員姓を持つことになった。そのとき姓を持たない人たちが競って「渡辺」姓を志向した。だから「ワタナベ」が多いのだという考えだ。

これもつらい。明治初めに姓を持たなかったのは皇族や宗教関係者で一般民衆は何らかの姓、たとえば土地名に関係する姓を持っていたらしい。封建時代の為政者が階級的差別化のためにそれを使わせなかっただけというのが本当のところ。それに「部」は7世紀中ごろの大化の改新で廃止されてしまっている。そんな古い記憶に頼るより、藤原家にあやかるほうがわかりやすい。藤原家なら大化の改新から江戸時代の大名まで血が続いている。現に藤原氏の家紋は日本の津々浦々にある。

では「ワタナベ」は地名から姓を得たのかというと、現代全国を見渡してワタナベという名のついた土地はおそらくないのではないかと。ワタナベさんの中で地名から姓を得た人は渡辺庄関係者だけではないだろうか。

渡辺氏よりも人口の多い姓の佐藤・鈴木・高橋・田中各氏はどうだろう。若干の漢字の書換えはしているが、こんなに異字体にこだわっていないからワタナベ氏には負ける。ではなんでワタナベ氏の人口が多く、さらにその中で多くの異字体を作ってまで渡辺氏を細分化しようとするのか。

氏族の人口が多い。名前の細分化にこだわっている。この2件を単純に考えてみると次のように要因が仮定できないだろうか。

ワタナベ氏は血縁的に根源がひとつの家系ではない。多くの家系で構成される。

だからワタナベ氏の各流れを識別するために何らかの個性的文字が必要だった。

私は「ワタナベ」姓の起源が次のようであったらと思う。

「バダ・バダ」は韓国語の「海」で、「聞けわたつみの声」とか「海神（わたつみ）」を祀る「綿津見神社」とかと日韓両国語で使われる言葉である。「渡辺」は「渡」は「わたる」の意味ではなくてこの「ワタ・バダ」を含んだ言葉だろうと思う。さらに「ベ」は天皇家の部曲をいう「部」ではなくて、ひょっとすると韓国語で「bae」でないかと思う。「bae」の意味は「船」、つまり「ワタベ」は「bada-bae（海船）」である可能性がある。「ワタナベ」とは陸に生活の基盤を持たない、海で暮らし海で仕事をする。つまり「ワタナベ」はある海洋民族を指し示す言

葉であったのである。

小さくとも民族の中では社会的な構成と秩序が必要である。階級が必要である。その階級は厳密に分けなければならない。その民族が日本列島にコロニーを形成し日本民族の一部となった。

日本人の中では例えば「山田太郎」でとおるが、国際的には「日本人山田太郎」である。こんな風に考えると「渡辺徹」さんは元は「渡辺人 徹」だった。でも日本人を構成することになったときに「日本人渡辺人 徹」というわけには行かないから「渡辺人」をはずさなければならなかった。でも民族の誇りは捨てられない。だから「 」姓を捨てる。すると「渡辺徹」となるが、仮に「渡辺人××徹」がいたとするとその人も「渡辺徹」だ。同姓同名になったふたりが渡辺族の社会的地位のどの辺にあるのか分からなくなる。挨拶するときどちらが高くなり、低くなるのか社会秩序の破壊だ。そこで「辺」の異体字を案出してかつての姓の代わりにした。

荒唐無稽、支離滅裂な話であるが、「邊」の異字体の山をみたときにそう考えたくなった。そうとでも考えないと、他の姓を持つ氏族がいつも収束する方向にあるのに、ワタナベ氏族はてんでんばらばらで個別に分散する傾向を持っているなんて寂しいことを考えなくてはならないから。

「邊」の字を楷書で実際に書いてみるとわかる。小学校の国語の時間に国語のノートのマス目の中に文字を書き連ねる練習をさせられた私たちにとってこの字を書くのはとてもつらい。「邊」の傍の部分は天地方向に長くなって当然なのだ。それをマスにあわせて正方形に収めるには天地方向をつぶすしかない。現に正方形で書かざるを得ない印刷文字はそうしている。しかし楷書でそうするのはよくない。マス目を気にせず書くとしてもなかなかバランスがとりにくい文字である。

原因は何。横画が多いことだ。だったら少なくすればよい。だから「自」を「白」にする、

「穴冠」を「」にする、「方」を「口」にするなどの工夫がなされる。

でも書きたかったのは「邊」であって、別の意義を意識したいわけではない。そういう状況での字形の変更だと思う。

その変更に対して何らかの意味付けをする。その意図は何か。うーん、やっぱり何かある。私の想像はあたっているかもしれない。

さて「辺」の異体字にこだわる「ワタナベ」さんへ提案。実際のところもっと「ナベ」の漢字が欲しいのではないか。そこで新しい「辺」をほしいワタナベさんに朗報。まだ「ワタナベ」を記すのに使われていないかもしれない「辺」の異字体がある。お

邊  
巖

教えしよう、2字ある右上は「俗字」、下は「古文」である。どうお使いになってもよろしいですよ。私が作ったものでなし、もし私が作ったものでも文字だから著作権はない。

この著作権は岡和男に帰属します。  
©Kazuo Oka 2000